

田上 時子のエッセイ

65歳ひとり住まい

65年生きた勤続疲労か、見かけは元気になっているが、実はかなり疲れている。

長い休暇を取りたいところだが、今も現役ではそうはいかないので、ストレス減の疲れない仕事を日々模索している。

その理由もあって、最近、自宅で仕事をすることが多いのだが、ピンポンと予約なしの訪問客の多さに驚く。宗教の話であったり、新商売の勧誘だったり。「工作中ですから」とお断りすることがほとんどだが、ついこの間、民生委員の「65歳以上のひとり住まいの高齢者調査に来ましたので、調査にお答えください」との訪問を受けた。

この調査は社会福祉協議会が、市の委託を受け、民生委員が実施する「行政調査」で、高齢者福祉サービスなどの充実を目的に実施するものだという。

自分が「独居老人」という意識がほとんどなかったが、確かに65歳になったし、ひとり住まいには間違いない。

突然の訪問に驚いたが、住民票から抽出されての調査だから答えないわけにはいかないと民生委員を招き入れた。

質問は、「家事はしていますか?」「自分の身の周りの世話はできますか?」「家族はいますか?」「相談がある時には誰にしますか?」など簡単なもの。

一人娘が早くに独立し、同居していた母も5年前に見送った。

亡母への喪失感から一歩前へ進むために一軒家の断捨離を徹底して行い、お気に入りの家具と最低必要な日用品だけを持って1LDK賃貸アパー

トに引っ越したのが3年前。それ以降、娘家族は徒歩圏内にいるが別に住み、自由自在気ままなひとり住まいを堪能している。

思い起こせば、ひとり住まいの最初は大学からだった。家からの独立が目的で親が追いかけてこられない距離の大学をあえて選んで受験した。バスなし、トイレと洗面場が共有の3畳、家賃は4,500円だった。

‘悠々自適’の‘悠々’とは、慌てず騒がず自然体で行動することだという。‘自適’の‘適’は心のままという意味があるから、自適は自らの心のままをいう。自らの心のままに、慌てず騒がず自然体で生きていくというのが悠々自適の姿だとすると、65歳になった今、時間的には程遠いながら、精神だけでも悠々自適に暮らしたいと考えている。

人間年齢を重ねるにつれ、身体の衰えは避けられないのは日々実感しているが、今のところ頭は動くし、何事にも興味はつきないので、他人に迷惑をかけない間は現役のままがいい。

冒頭の行政調査は5分ほどで終了。張り切って答えようと身構えた割にはあっけない。調査目的は地域の福祉サービスを探るということであったが、最後まで、「どのような地域サービスを希望しますか?」と訊かれなかったのか不思議でならない。統計学的センスからいうと、調査は実態を把握・分析し、当事者の希望を明らかにするはずが、後者が抜けている。

これでいいの行政調査よ!と突っ込みたくなる。